

口腔扁平上皮癌の臨床病理学的因子とC反応性蛋白の関係 —メタ解析—

井上 明美¹, 松本 俊英^{1,2}, 伊東 由夏¹, 高橋 博之^{1,2}

¹北里大学大学院医療系研究科細胞組織病理学

²北里大学医療衛生学部医療検査学科病理学

C反応性タンパク質 (CRP) レベルが口腔扁平上皮癌 (OSCC) の予後因子であるというメタ解析の報告があるが, CRP レベルと臨床病理学的因子との関係の詳細は不明である。今回我々は, OSCC における術前CRPレベルと臨床病理学的因子の関係を明らかにするためにメタ解析を行った。PubMed, Web of Science, およびEmbaseで検索すると, 有用なデータが記載されている論文が3件抽出され, 患者合計は207人であった。メタ解析では術前CRPレベル高値は, OSCCの深達度, リンパ節転移, TNMステージと関連していた。術前の血液検査のCRP値が高値の際, 感染症など他の炎症性疾患の存在が除外されれば, 腫瘍の進行を予測し治療法を選択する際の有用な情報の1つになる可能性が示唆された。

Keywords : 口腔扁平上皮癌, C反応性蛋白, 臨床病理学的因子, メタ解析

表在型食道扁平上皮癌に対する内視鏡的切除後の 化学放射線療法の安全性と有効性

和田 拓也, 石戸 謙次, 渡辺 晃識, 古江 康明,
北原 言, 田邊 聡, 草野 央

北里大学医学部消化器内科

目的 : 食道表在癌に対する内視鏡的切除後に, 切除標本の病理学的検索にてリンパ節転移リスクが高い粘膜下層浸潤や脈管侵襲を伴う病変に対しては, 根治を目指した外科手術が標準治療とされている。一方, 侵襲を伴う外科切除に代えて化学放射線療法も行われるようになってきている。今回われわれは, 内視鏡的切除後に粘膜下層浸潤または脈管侵襲が認められた患者における, 追加化学放射線療法の有用性を評価した。

方法 : 2000年1月から2015年7月までに当院で内視鏡的切除を受けた食道表在癌患者364例(425病変)のうち, 病理組織学的に粘膜下層浸潤または脈管侵襲を伴う扁平上皮癌と診断された患者は93例(93病変)であった。この93例のうち, 追加化学放射線療法を受けた41例(CRT群), 無治療経過観察された52例(経過観察群)を対象として, CRT群, 経過観察群における長期予後の比較を行った。

結果 : 年齢中央値はCRT群で68歳(範囲, 53-79), 経過観察群で72歳(範囲, 59-89)であった($P=0.01$)。5年後の全生存率はCRT群で87.5%, 経過観察群で67.4%であった($P=0.03$)。5年後の無再発生存率はCRT群で80.8%, 追跡群で64.6%であった($P=0.056$)。

結論 : 表在型食道扁平上皮癌に対する内視鏡的切除後の追加化学放射線療法は, 効果的な臓器温存戦略となる可能性がある。

Keywords : 化学放射線療法, 食道扁平上皮癌, 後方視的観察研究

2歳から6歳児における標準的な語彙発達の横断的調査

水戸 陽子¹, 原 由紀¹, 鈴木 恵太², 深瀬 裕子¹,
上岡 清乃¹, 秦 若菜¹, 村上 健¹, 市川 勝¹,
澤田 拓也¹, 石坂 郁代¹

¹北里大学医療衛生学部

²岩手大学教育学部

目的：幼児期の語彙発達の様相の基礎的データを収集することを目的として、2歳から6歳児に調査を実施し、標準的な言語発達のデータを得ることを試みた。

方法：対象は、関東大都市圏および東北地方都市圏の保育園、幼稚園に所属する2歳から6歳の232名である。先行研究をもとに作成した理解語彙課題、表出語彙課題を実施した。両課題ともに、名詞60語、動詞26語、形容詞・形容動詞15語で構成されている。分析は、まず各課題の品詞別における平均正答数を算出した。また、各品詞の課題語彙数に対する正答数の割合を平均正答率として算出した。これらの平均正答数および平均正答率に対し、分析対象者全体、年齢群別（2歳後半から6歳前半）、性別、地域別について、要約統計量を算出した。さらに、性別および地域別に、年齢群別の群間比較を行った。検定には、対応のない*t*検定を用いた。

結果：理解課題および表出課題ともに、名詞、動詞、形容詞全ての品詞において、年齢上昇に伴う平均正答数の上昇を認めた。

結語：2歳から6歳児の標準的な言語発達のデータを得ることができた。これらのデータをもとに、言語発達の遅れの早期発見と指導支援のエビデンスとしての指標となり得る検査の開発につなげていきたい。

Keywords：語彙発達, 理解語彙, 表出語彙, 言語発達

救急医療体制における地域性を考慮した量的・質的評価を合わせた 新たな定量的評価指標の開発

荒井 康夫^{1,2}, 丸橋 孝昭³, 大井 真里奈³, 丸木 英雄³,
金 宗巧³, 長田 真由子³, 秋永 誠志郎³, 浅利 靖³

¹北里大学病院診療情報管理室

²北里大学未来工学部データサイエンス学科

³北里大学医学部救命救急医学

目的: 本研究では、地域性によらず量的・質的評価を総合した新しい二次救急医療機関の定量的評価指標法の開発を目的とした。

対象と方法: 2019年度に厚生労働省医政局地域医療課が全国の二次救急医療機関に対して実施した「二次救急医療機関の救急医療体制現状調べ(以下: 現況調)」および「第二次救急医療機関の自己チェックリスト(以下: 自己チェックリスト)」の両者に回答が得られた759施設のデータを解析した。自己チェックリスト(55点満点)の点数は、我々が昨年度に自己チェックリストをもとに作成した改訂版自己チェックリスト(39点満点)に変換したのち使用した。さらに、各医療機関を医療法で定められた2次医療圏ごとに集計し、十分なデータ数が得られた2次医療圏4地域において以下の追加解析を行った。各医療機関の救急車受け入れ件数と2次医療圏全体の救急出動件数から救急車カバー率を算出し、そこからさらに改訂版自己チェックリストと同程度の重みづけとなるようなスコアリング=カバースコアを算出した。カバースコアと改訂版自己チェックリストの点数を合わせた「救急医療指数」(78点満点)を病院個別の救急医療に関する新たな定量的指標として、その妥当性を2次医療圏4地域で比較した。

結果: 対象における自己チェックリストから算出した改訂版自己チェックリストの平均は 30.5 ± 6.9 点であった。改訂版自己チェックリストと救急車受け入れ件数には相関がみられ($r=0.739$)、カバースコアと改訂版自己チェックリストを合わせて算出した救急医療指数を2次医療圏4地域で比較すると統計学的有意差はなかった($P=0.40$)。

結語: 救急医療指数は地域性に関わらず、病院個別の救急医療体制・成果を評価する新たな指標として利用できる可能性がある。

Keywords: 2次救急医療施設, 定量的指標, 救急医療指数

医学生とe-ラーニング —紙媒体からデジタルメディアへの転換—

Robert E. Brandt^{1,2}, 竹内 昭博², 原 勇輔³, 千葉 宏毅⁴

¹MedEd Japan, 東京

²北里大学医学部医療情報教育研究部門

³北里大学大学院医療系研究科消化器内科学

⁴北里大学医学部医学教育研究部門

背景：情報技術（インフォメーションテクノロジー：IT）の普及によってe-ラーニングは、教科書に沿った授業に対応可能となり、今後医学部教員による対面授業に一部置き換わるであろう。現代の医学生には、ITツールやコンピューターの活用能力がこれまで以上に必要になる。パンデミックは、世界的に教育上の混乱を引き起こしたが、一方オンラインビデオ学習やe-ラーニングコンテンツの拡大など様々な新しい発展につながった。医学生がスマートフォンで辞書や医学情報にアクセスすることは必要不可欠となっているが、時には学習効果を阻害することもある。

目的：医学生がe-ラーニングを行う必要性を強調し、その効果が最大化される方法を示す。

方法：2004年から2023年までに海外実習に応募した日本人医学生に半構造化面接法を用いて、医学用語と英語能力のレベルを評価した。

結論：何人かの医学生の医学用語と英語能力は向上していたが、COVIDパンデミック流行以前よりレベルが低い者もいた。中には解剖学、疾患、治療等に関する用語を英語で認識できない医学生もいた。医学生は、有効な情報にアクセスし正確な医学知識と医学英語を学ぶ必要がある。今後の医学教育は、e-ラーニングとデジタルメディアの活用方法にかかっている。そのため、あふれる情報の中から正誤を見極め、必要とする情報を引き出せるような学生教育が喫緊の課題である。

Keywords：デジタルメディア, e-ラーニング, オンライン辞書, スマートフォン, 臨床実習

スヌーズレン活動による多感覚刺激が与える 心理的効果やストレス軽減作用について

實原 花奈¹, 久保 誠², 高橋 香代子³

¹北里大学大学院医療系研究科感覚・統御医科学群リハビリテーション科学博士課程

²北里大学医療衛生学部医療検査学科微生物学

³北里大学医療衛生学部リハビリテーション学科作業療法学専攻

背景: 近年, リラクゼーション効果があるとしてスヌーズレン活動が注目されているが, 先行研究の対象者は障害児者が多く, その評価指標も行動観察などに限られ, 対象者の心理的側面を主観的に評価したものは少ない。そのため, 本研究では健常学生を対象とし, スヌーズレン活動のリラクゼーション効果を心理的・生理的側面から検討することを目的とした。

対象と方法: 本研究は前向きクロスオーバー研究デザインであり, 対象は健常学生20名であった。クレペリン検査を実施後, スヌーズレン活動および休憩を実施した。効果指標としては, POMS 2成人用短縮版, STAI 状態・特性不安検査, 数値評価スケール Numerical Rating Scale を参考とした疲労度, 唾液中の cortisol 濃度を測定した。解析には, 実験条件と時間を独立変数とした2要因の分散分析を実施した。さらに, 生理的指標と心理的指標の関連性については, Spearman の順位相関係数を用いた。

結果: POMS の「怒り/敵意」, 「混乱」, 「疲労感」, 「緊張/不安」, 「総合的気分状態」, STAI, 疲労度で時間の主効果が認められた。実験条件と時間の交互作用は, STAI と疲労度において認められた。さらに, 唾液コルチゾール濃度と POMS の「混乱」, 唾液コルチゾール濃度と POMS の「緊張/不安」との間に有意な正の相関関係が認められた。

結語: スヌーズレン活動による多感覚刺激が健常者の精神的ストレスを軽減することが示された。特に不安感や疲労感に対する心理側面に有用であることが明らかとなった。

Keywords: スヌーズレン活動, 多感覚刺激, ストレス, 疲労, 唾液コルチゾール

病気の子どもをもつ保護者の精神的健康について —患者家族滞在施設利用者を対象として—

清水 絢香, 鹿内 裕恵, 岩満 優美

北里大学大学院医療系研究科医療心理学

目的: 患者家族滞在施設を利用する病気の子どもをもつ保護者の精神的健康の低さの要因の検討と保護者の思いについて検討した。

方法: 都内4患者家族滞在施設を利用する232名の保護者を対象に4種類の質問紙を配布し, 無記名で回答するように依頼した。100名が返信し, 最終的に83名を分析対象とした。

結果: 対象者の51.8%が神経症傾向を示した。ステップワイズ法による重回帰分析の結果, 不確実性, 同居者の有無, 病気の子どもの人数が保護者の精神的健康の低さと有意な正の関連を, 所属的サポートが有意な負の関連を示した。保護者の今の思いの質的分析の結果, 心理的苦痛, 良好なソーシャルサポート, ソーシャルサポートの問題, 精神的安定・成長, 行政・社会への要望などの7カテゴリが抽出された。

結論: 子どもの病気に関する不確実性の高さ, 自宅での同居者がいること, 病気の子どもの人数の多さ, 所属的サポートの少なさが精神的健康の低さと関連することが明らかとなった。

Keywords: 病気の子ども, 保護者, 患者家族滞在施設, 精神的健康, 不確実性

夜勤シミュレーション中の認知課題パフォーマンス —高照度光下における450–500 nm帯域遮断の影響—

井上 真里¹, 田ヶ谷 浩邦^{1,2,3}, 松永 祐輔⁴, 魚住 麻美¹,
市倉 加奈子^{2,3}, 深瀬 裕子^{2,3}

¹北里大学大学院医療系研究科睡眠医科学

²北里大学大学院医療系研究科臨床脳神経心理学

³北里大学医療衛生学部保健衛生学科精神保健学

⁴鶴川サナトリウム病院臨床心理室

目的：睡眠と覚醒のサイクルを調節するのに重要な概日リズムは、光によって影響を受ける。光は夜勤中の覚醒度やパフォーマンスに影響を及ぼすと考えられており、特に、450–500 nm帯域の光は覚醒度に対する影響が注目されている。本研究では、高照度光下において、帯域特異遮断効果のあるゴーグルを用いて、450–500 nm帯域の光が夜勤シミュレーション中の認知課題パフォーマンスに与える影響を検討することを目的とした。

方法：本研究は無作為化二重盲検クロスオーバーデザインで実施した。対象者は、450–500 nm帯域光遮断およびプラセボゴーグルを用いた夜勤シミュレーション実験に参加した。アウトカムはpsychomotor vigilance task (PVT), digit symbol substitution test (DSST), 心拍変動であった。

結果：PVT, DSST, 心拍変動において、ゴーグルによる有意な差は認められなかった。

考察：450–500 nm帯域の光を遮断してもパフォーマンスに影響がみられなかった。これらのことから、夜勤中のパフォーマンスの維持、向上のためには、光のみならず仮眠や食事、その他環境要因なども含めて包括的に検討する必要があると考えられる。

Keywords：夜間交代勤務, ブルーライト, 認知課題, 帯域特異的遮断, 夜勤シミュレーション

非結核性抗酸菌症に対する胸腔鏡下手術の周術期治療成績

中島 裕康

独立行政法人国立病院機構福岡東医療センター呼吸器外科

背景：抗生剤治療や吸入治療が進歩する現在においても、非結核性抗酸菌症に対して外科治療は一部の症例で有用と考えられる。手術は、病巣が限局しており、空洞形成や排菌の持続などが認められる症例が適応と考えられる。手術の目的は、菌が大量に存在する主病巣を切除して体内の菌負荷を減らし、病勢を制御することである。当施設における、非結核性抗酸菌症に対する外科治療の成績を後方視的に解析し、胸腔鏡下手術の妥当性を検討する。

対象と方法：2003年から2021年までに切除された、非結核性抗酸菌症49例を対象とした。手術アプローチは、胸腔鏡が28例で、開胸が21例であった。

結果：胸腔鏡群と開胸群において、癒着の程度に有意差は認めなかったが、手術時間、出血量およびドレナージ期間は胸腔鏡群で有意に少なかった。また、多変量解析において、手術アプローチがドレナージ期間に影響する独立した因子となった。

結語：非結核性抗酸菌症の手術においては、術中胸腔内に癒着を認めることが多く、切除に難渋することがあるが、本研究の結果から胸腔鏡手術の良い適応と考える。

Keywords：肺非結核性抗酸菌症, 胸腔鏡下手術, 周術期治療成績